ぼくの荒ぶるピストンを受けとめて

俺は車を愛し、とくにエンジンに目がない。

今の時代、人人は格別アリガタらずに運転しているなれど、原動力であるエンジンは崇高なものだ。

人類の英知が詰めこまれた代物で、世界でエンジンを製造できるのは、日本を含めて限られた国だけ。

なんて知れば知るほど、魅力の虜になり、高性能なエンジンをつんだ車を買うだけでは飽き足らず、改造にも手を。

社会人としてこつこつせっせと働いて、生活費を限界まで削り、お金を貯め、ついに俺好みのお値打ちもののエンジンをゲット。
すこし型が古いながら、改造がしやすい我がスポーツカーに装着することに。

車の修理工の友人に任せて、作業場でエンジンの装着工程を見守って。
作業が済んだのは、深夜の〇時。

とはいえ、友人曰く「明日、エンジンを動かしてみて、いろいろとカクニンや点検をするから」とお持ち帰りはできず。

「離れるのいやだな・・・」と呟けば「だったら、泊まってけば」とソファを指差された。
たまに夜遅くまで修理し、疲れはてて帰れずに、ソファで寝泊まりす

るとか。

お言葉に甘えて、ソファによこになり、新エンジンを搭載したスポーツカーをうっとりと眺めていたところ。

「ああ、そうそう、ここ車の幽霊でるから」と思いがけない発言が。

「俺が働くまえに、車を虐待する、鼻持ちならないカネモチがいたんだと。

そのときは経営がくるしくて、虐待による修理を頼まれるたび、しぶしぶ受けていたらしいけど・・・。

しばらくして新しい車を持ってきて。

そのころには経営が安定していたから断ったとはいえ、以降、幽霊がでるようになったって。

虐待された車が、よくここに居たからかな。
さんざんイタめつけられた挙句、あっさり捨てられて無念なんだろう」
ちなみに車の特徴を聞くと、格式高い高級セダンだそうな。
で、その幽霊がでたとして、なにをするかといえば「いや、俺、見たことないし、先輩ら教えてくれないから分かんね」とのこと。
虐待された車を哀れんだ俺は、コワイとは思わず、我が愛車を目で愛でながら、いつの間にか就寝。
夢も見ず深い眠りに落ちていたのが、にわかに腹に重みと衝撃を受け、目を見開いた。
見あげれば、スーツを着た青年が腹に跨って、涙をぼろぼろ。

眼鏡をかけ、高級スーツに身を包み、育ちがよさそうなあたり「これが例の幽霊・・・？」とつい思う。

夢かうつつか分からず、でも、事情を聞いただけに放っておけないで「だいじょうぶ、だいじょうぶだから」と肩をなでなで。
瞼をあげて、涙を散らした彼は「ああ、あなたが、ご主人だったらよかったのに」と上体を倒して急接近。

端正な顔が急接近し、どきまぎする間もなく「ひ、あ、ああ・・・！」と甲高く鳴いた。
股間に固いのが食いこみ、ぐりぐりと擦りあげられてのこと。

彼の性器だろうものの、いや、それにしても、この感触からして俺の倍はありそう。

とまどいつつ「あ、うそ、おっき・・・！」と叫べば「ギャップがあるでしょ？」と含み笑い。

「スポーツカーに搭載するような、馬力が化物級のエンジンがカスタマイズされていたから。
でも、ご主人はイジメるばかりで、あまり走ってくれなかったから、ぼくは満たされなくて」

「哀れむなら、どうか、ぼくの不完全燃焼のエンジンを慰めて」と熱熱の巨根でずりずり。
エンジン愛に溢れる俺にしたら、例えられるだけで高揚してしまい、あっという間にズボンを膨らませて湿らせて。

「ぼくのエンジンいい？ふふ、お股がすごく濡れているね？」

「そ、な、いわな、あ、あ、ら、めえ、も、俺、エ、ジン、で、イ、ちゃ、あう、くうあああ！」

車の幽霊にイかされて、もっと頭が混乱するも、息を整える暇をくれずに、ズボンをパンツごとずるり。

「高級オイルだよ」と太ももに粘着質な液体を垂らされ、尻の奥に指を侵入。

「よく、ほぐさないとね。

ぼくのピストンの摩擦は、火花が散るくらい激烈だから」

「ピストン」と聞いて、つい胸を高鳴らせてしまい、尻を指で弄ばれるのも、あんあんヨがってしまう。

すっかり再勃起し、とめどなくお漏らしをだらだら。

初経験にして、尻のいたずらでイきそうになったのを直前に指が退いて。
見あげれば、かっちりと高級スーツを着た麗しき青年が、ぎんぎんの巨根を剥きだしに「ぼくには乗れない代わりに」と舌なめずり。
「火を噴くエンジンの壮絶なピストン運動を心ゆくまで、体内で味わって」
聞くだけで震えてしまい、過言でなくじゅっぽおおう！と貫かれて、精液を散乱。
ピストンが荒荒しく上下するように、熱い鉄のような巨根が抜き差しされ、突かれるたびにあんあん射精を。
「や、ああ、ピス、ト、直、接、だ、だめえ、きもち、よ、すぎ、は

あう、く、エン、ジ、しゅごお、も、もお、ひぎいいい！」

高級セダンの幽霊にレイプされ、あられもなくメスイキをしまくり。

翌朝には解放されたとはいえ、腰が立たず。

だけではなくて、向かいにいた愛車がだまって見過ごすことはなく・・・。

俺の怒りのピストンを食らいやがれ

修理工の友人に、愛車を改造してもらったのは万々歳として、まさか処女を失うとは・・・。

目覚めたら腰痛に悲鳴をあげ、全身筋肉痛に悶えたとはいえ、友人に「話はほんとうだった」と打ちあけるわけがなく。
できるだけ平静を装い、テストの済んだ愛車に乗って帰宅。

ほんとうなら、すぐにでも愛車を高速道路で走らせたかったのだが、さすがに家についたらバタンキュー。

ドライブデートを中止した代わりに、ガレージにいれた愛車を専用の

タオルでピカピカに。
あらためて新エンジンを積んだ愛車の雄姿を、動画と写真で撮りまくり。

カメラで撮りつくしたら、体力も底を尽いてしまい。
デリバリーで頼んだ昼食をとったら、ガレージに置いてあるソファベッドに座ってぐったり。

そりゃあ、修理工場での処女消失はショッキングだったとはいえ、新エンジンを搭載しパワーアップした愛車を眺めていれば、胸が躍ってやまず。

体の激痛は現実的なれど、相手は霊的なものとあって、一晩の記憶には、どこか現実みがない。

どうせ、修理工場で夜を過ごさなければ、二回目はなかろうし、一回だけなら悪夢と片づけられるし。

「早く高速を疾走しようなあー！」とソファベッドにもたれながら、きらめく愛車のスポーツカーに笑いかけ、そのあとも浮き浮きと語りつづけたものを、そのうち寝落ち。

「おい」とどすの利いた声で呼ばれたようで、瞼を跳ねあげれば、陽光が注いでいたはずの室内が真っ暗。

すこしして目が慣れて、と同時に息を飲んだ。

まず、びっくりしたのは、目のまえに男が立っていたこと。

そして、その背後に我が愛車が見当たらないこと。

男は中年で、きれいに髭を整えた、なかなか顔も整ったダンディーな雰囲気の、でも、プロレスラーのような体つきに厳めしさ。

一瞬、車泥棒の親玉かと思ったが、いや、それにしても、俺の鼻先に巨大もっこりがある説明がつかない。

驚くあまり呆けているうちに、中年の男が、ジッパーの金具を吹きとばし、ズボンとパンツを引き裂いた。

俺の眼前に突きつけられた、闇のなかでは、黒黒として鋼鉄のように見えるそれ。

眺める間もなく、乱暴に髪をつかまれて、黒い男根を顔に押しつけられて。

「マーキングしてやる」と謎の発言をしたものを、なぜか俺は、不快がらず、なんなら涎を垂らして、中年の男のちんこに舌を這わせだす。

まえの晩、さんざんピストンのような男根を尻に飲みこんだせいか。そのイメージがのこったままで、エンジン愛が深い俺としたら「ああ、このピストンもいい・・・」ときめくというもの。

本物のエンジンは舐めたくても舐められないし。

また、どうしても、あのときの強烈な快感が忘れられず「はあ、ああ、ふう、あふう・・・」とひたすら舐めて、腰をくねらせて勃起。

布の摩擦だけで「はあん・・・」と喘いで、お漏らしをだらだら。

それにしても、フェラなんて初めてだし、アイスを舐めるように、ペロ

ペロするだけだし、中年の男は物足りないのでは。
そう思うも、意外に口に突っこむなど荒っぽくせず、舌をくっつけたまま見あげると。

暗闇でも分かる毛穴から血が噴きださんばかりの赤面。
闘牛のように鼻息荒くしつつ、唇を噛んでいるのは、イくのを堪えているようで、激憤をしているような。

目が合ったなら睨みつけて、髪を引っぱり、のけ反った顔に精液の大噴射。
顔と胸元が白濁の液体でべっとりとなり「はひい・・・」とつられて先走りを溢れさせるも、相手はそこに見向きもせず、Tシャツをめくって、膨張させた男根を寄せて。

先っぽの割れ目に、乳首を挟むようにし、精液をなすりつけながら、ゆるくピストンをするようにぬぷぬぷ。

「や、だめえ、こん、なあ、はあ、見な、でえ、恥ずか、し・・・！」と乳首をちんこでいじられて、早くも二回目の射精。

「男なのに、おっさんに乳首だけで・・・」と落ちこみつつ、いい加減、相手の正体に察しがついてきて。

ソファベッドにうつ伏せで倒されて、尻を突きだす格好をされたなら、お待ちかねの、新エンジン、暴れ馬のように強力ながら癖の強い特徴のそれが、尻にセット。

「もう浮気は許さねえ。俺以外の車に乗れないようにしてやる」とぐぶちゅうう！と激烈に突入。

セダンよりパワーがえげつなく、不規則な連打で、暴れ狂うように叩きこまれるピストン。
股が裂けそうなら、理性も粉々になってしまい、もうエンジン愛がほとばしるまま、喘ぎまくり。

「ああ、しゅご、あひ、し、新、エン、ジン、いい、いい、いいのお！もっ、もっとお、おまえ、怒り、ピス、トン、こめ、てえ、俺、ぶつ、けて！あん、あん、あん、たまん、にゃあああああ！」

我が愛車に浮気禁止！と迫られたが、逆効果。
ほかの車種は、ほかのエンジンのピストンはと、いろいろと味わいたくなり、がんがん異性交を。

まあ、そのたび、愛車におしおきエッチをされるのだが、それもまたヨシ。
車とエンジンを愛でながら、今は充実した性生活も送っている。